

「あんなやつは友人ではない、おれの絵をなんだと思ってるんだ！ 描き損じをくれ？ 全くふさげるなだよ」。最近個展を終えたばかりの某画家氏、パーティーの会場に入ってくるなり、いきなり不満をブチまけた。個性派の多い画家同士の口論でも、こんなにヒートした姿は見たことがなかった。

唐獅子

美術家の友人

上原 誠勇

「ワジークトゥヤー」。旧来の友人から心外なことを言われて、よほどこたえたらしいのである。

店先のマンジュウに少しキスがが付いてしまっただり物になり

美術家がどんな想(おも)いで創作に向かっているのか、まるで理解してないのである。作家にとって、自分の作品は分身のように大事なものである。一枚のキャンパスのために、自殺だって作する意味、また、それらの作品を通して作家の精神性や、思想性、総じて美意識という表現の本質を知ることが、時間がかかることであり複雑で難しい。作品の背後にある、目に見えないもの、ぼろぼろとして立ち上がっているものを知ら(感じ)なければ(作品(作家)の本質に)触れることができない。



剛 カット・新城

「あいつは最近、家を新築したんだ。君の絵は高くて買えないから、描き損じでいいよ、僕に一枚くれないか。って言うんだよ。しかも昔から付き合っている友人がだよ！ マーカラ

ない。「食べる分には味も変わらないよ。ホレ、持って行きなさい」なんて、親せきの菓子屋のオバサンから、キスものマンジュウを頂いてしまう、あの感覚である。

ありうる世界が芸術の世界ではない。とかく個性の強い感性でオフラートされた画面には感傷されがちである。しかし、その奥に潜んでいる、あるものを感じた時、見る側と作品との対話が始まる。(画廊沖繩代表)

(画廊沖繩代表)